

令和 5 年 6 月 29 日現在

機関番号：35502

研究種目：若手研究

研究期間：2019～2022

課題番号：19K14221

研究課題名（和文）駆け出し社会科教師の専門性開発研究：「理論的根拠」の形成支援に注目して

研究課題名（英文）Fundamental Research to Develop the Professionalism of Fledgling Social Studies Teachers: Focusing on the Formation Support of "Rationale Development"

研究代表者

大坂 遊 (Osaka, Yu)

周南公立大学・経済学部・准教授

研究者番号：30805643

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,100,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では、米国における「理論的根拠」研究の成果を基盤にした介入型の教員研修をデザイン・実施してその効果を検証するとともに、教師教育者の専門性を開発するセルフスタディをデザイン・実施してその効果を検証することを企図した。本研究を通して、駆け出し社会科教師の力量形成には大学を基盤とした教師教育者の介入やメンタリングが有効に機能することや、教員養成機関に所属する教師教育者はセルフスタディを通して自身の被教育経験を探究したり理論的根拠を言語化したりする活動が専門性開発に有効であることなど、教師教育上の有益な示唆を仮説的に提示することができた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

教員養成時代から初任期にかけての「駆け出し」期の社会科教師にとって、実践の核となる「理論的根拠」の形成と、そのための教師教育者による支援が必要不可欠であることが指摘されているが、日本におけるこれらの研究は極めて乏しい状態であった。本研究を通して、大学の教師教育者が卒業後の学生を継続的に支援することの有効性が示唆された。また、社会科教師の養成・研修を担う教師教育者が、自身の専門性開発を開発していくためには、同様の立場や問題意識を有する同僚（同じ職場に限らない）とともに協働的に自身の教師教育実践の背景や根拠を探る「セルフスタディ」の研究手法論が有効に機能することが示唆された。

研究成果の概要（英文）：This study was designed to verify the effectiveness of an intervention-based teacher education program designed and implemented based on the results of "rationale" research in the United States, as well as to verify the effectiveness of a self-study designed and implemented to develop the expertise of teacher educators. Through this study, the researcher found that mentoring by university-based teacher educators can function effectively in building the competencies of novice social studies teachers, and also found that institution-based teacher educators can develop their expertise through self-study activities in which they explore their own teaching experiences and verbalize their rationales.

研究分野：社会科教育，教師教育

キーワード：社会科教育 教師教育 教員養成 教員研修 駆け出し期 理論的根拠 セルフスタディ メンタリング

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

1. 研究開始当初の背景

教師教育の研究では、教員養成時代から入職後の初任校での経験が、その後の教師のキャリア設計を大きく左右することが指摘されている。この時期を「駆け出し期」と名付けると、先行研究は「駆け出し」社会科教師の力量形成の特質と課題を次のように説明してきた。

第一に、駆け出し社会科教師の専門性を開発するためには「理論的根拠」、すなわち教師が「自分は社会科の実践を通してどのような子どもを育てたいのか」という信念を、理想とする社会科教育のあり方と照らし合わせながら実践していく姿勢が不可欠なこと。しかし、わが国における駆け出し期の社会科教師の「理論的根拠」の内実は明らかにされてこなかった。

第二に、駆け出し社会科教師の「理論的根拠」の形成には、それを支える「教師教育者」、すなわち大学教員や教育実習担当教員、そして入職後の先輩教師や管理職、指導主事といった“先生の先生”の存在が重要となること。しかし、諸外国を含め駆け出し期の社会科教師の「理論的根拠」の形成を支援する教師教育者の役割や専門性は明らかにされてこなかった。

2. 研究の目的

上述の問題意識をふまえ、本研究では次の3つの「問い」の解明を目指した。

- 問い①：駆け出し期の社会科教師は、何をよりどころに自身の実践の「理論的根拠」を形成していくのか？そこには、どんな困難や葛藤が待ち受けているのか？
- 問い②：駆け出し期の社会科教師が、自身の実践の「理論的根拠」を形成させていくために、教師教育者はどのような働きかけを行えばよいか？
- 問い③：駆け出し期の社会科教師の力量形成を支えるために、教師教育者はどのように自身の力量を高めていけばよいか？

本研究は、上述の3つの学術的「問い」を解明し、駆け出し社会科教師と、それを支える教師教育者の専門性開発に資することを目的とする。本研究を通して得られる具体的な成果として、①駆け出し期の社会科教師が抱える「リアリティ・ショック」を解消し、自身が目指す理想の社会科授業を実践していくための「理論的根拠」の形成を支援する教師教育（養成・研修）プログラムの開発や改善が期待できる。また、②その成長を支援する教師教育者に求められる専門性の一端が明らかになることも期待される。

3. 研究の方法

(1) 当初予定した手続きの全体像

本研究では当初、上述の3つの学術的「問い」を解明するための具体的アプローチとして、①米国における「rationale」研究の到達点の解明、②「理論的根拠」を基盤にした教師教育実践のデザインと試行、③教師教育者のセルフスタディのデザインと試行、の3つの研究を3ヶ年計画で推進していくことを計画していた（図1参照）。これらは、それぞれ上述の「問い」①～③に対応している。

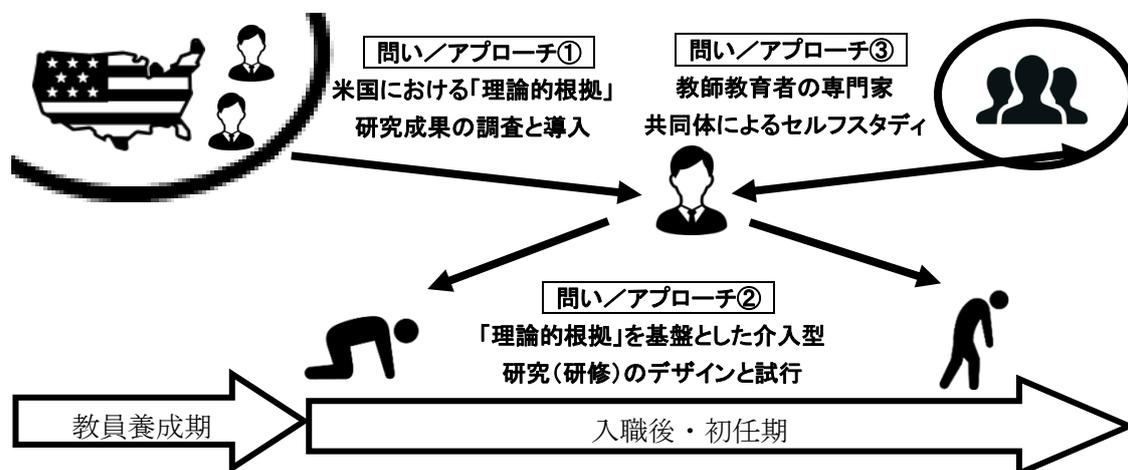


図1 本研究のリサーチデザイン (申請者作成)

①米国における「rationale」研究の到達点の解明【問い①へのアプローチ】

数十年にわたって研究されてきた「rationale（理論的根拠）」は、近年、Todd S. Hawley を中心とする若手社会科教育研究者によって、実証的なアプローチによってその内実が解明されつつある（たとえばHawley；2010 など）。このような成果を日本の駆け出し社会科教師の支援に応用するために、実証的な調査方法等について、研究者らに対して聞き取り調査を行う。

②「理論的根拠」を基盤にした教師教育実践のデザインと試行【問い②へのアプローチ】

Hawley を始めとする米国の社会科教師教育研究者らは、駆け出し社会科教師が「理論的根拠」を形成するための方法論として、「理論的根拠に基づく実践」の有効性を提唱する。これは、教師教育者が実践者に対し「あなたは何のために社会科教育を教えるのか？」と問い続け、それを口頭やテキストによって表現することで自己の実践の正当化を要求する方法である。このアプローチを日本において実践するために、申請者と信頼関係にある中学校・高等学校と協働し、初任者教員に対して介入型の教員研修を実施し、その効果を検証する。

③教師教育者のセルフスタディのデザインと試行【問い③へのアプローチ】

教師教育者の力量形成の方法論として、近年では「セルフスタディ」と呼ばれるアプローチが実践されている。これは、教師教育者自身が共同で自らの実践のあり方やその信念について省察することで、自己の専門性を開発したり類似の問題状況を改善するための示唆を得たりしようとする方法論である（Crowe；2010）。このアプローチを日本において実践するために、申請者を含む若手社会科教育研究者らとともに、「駆け出し教師の成長支援」をテーマとしたセルフスタディを実施することで、その効果を検証する。

（2）Covid-19 等によるアプローチの修正

新型コロナウイルス感染症（Covid-19）の流行拡大にともない、上述した3つのアプローチのうち、研究当初に実施予定であった、①米国における「rationale」研究の到達点の解明のための現地調査が困難となった。また、①を前提として実施予定だった②「理論的根拠」を基盤にした教師教育実践のデザインと試行も期間内での実施が難しくなった。そのため、当初予定を変更し、『理論的根拠』の形成を志向する教師教育を経験した駆け出し教師の追跡調査（②のアプローチの修正）および『駆け出し教師の成長支援』をテーマとしたセルフスタディの実施（こちらは当初通り③のアプローチ）を実施した。

新たな②の研究については、研究代表者と信頼関係にある初任の高等学校教諭の協力のもと、自身の社会科教育実践の「理論的根拠」の問い直しと成長を促す介入型の研修を実施することについての合意を得た。調査開始当初ははまだ大学に在学中であったため、次年度の本格実施に向けた基礎調査および事前研修を実施した。その後、COVID-19 の影響により、当初予定していた初任高等学校教諭に対する「理論的根拠」の問い直しと成長を促す介入型の研修を対面形式で実施することが困難となった。その代替措置として、オンライン上で継続的に実践の省察を促し改善のための情報を提供するメンタリングを実施し、その効果を検証した。

③の研究については、以下の2つのセルフスタディを実施した。

第一に、当初の予定通り、教師教育者である研究代表者が研究協力者（大学教員）とともに、自らの実践を対象とする「セルフスタディ」を複数回実施し、その成果を検証した。

第二に、研究代表者が教師教育者1年目であった2017年度に実施した、社会科教員養成に携わる当事者である研究代表者を含む5名のセルフスタディプロジェクトの成果を論文化した。本研究は、当時行った実践・研究の成果をまとめるだけでなく、数年が経過した現段階（2022年度）において、当時の資料をどのように振り返り意義づけるのかについて省察するセルフスタディとして位置づけた。

4. 研究成果

（1）『理論的根拠』の形成を志向する教師教育を経験した駆け出し教師の追跡調査の成果

研究協力者であるA氏への追加の事実確認を通して、以下のことが明らかとなった。

第一に、学生時代の調査を通して、大学の社会科教員養成カリキュラムがA氏の理論的根拠の形成・具体化に肯定的に寄与している実態が示唆された。第二に、A氏は、コミュニケーションや活動的な学びを重視する大学時代のカリキュラムや授業を通して、それまでの内向的な性格が変化し、その経験が「社会に出て困らないための社会科」「主体的で活動的な学びをとまなう授業」といった授業イメージの形成へつながっていた。第三に、A氏は、学校へのICTの導入、支援的な同僚、授業づくりに専念できる余裕のある環境、協力的な生徒の実態などに支えられて、この社会科授業イメージを継続的に追究・発展させ続けることができていた。第四に、大学での学びの経験は時間経過とともに徐々に言及されなくなる一方で、A氏は大学で学んだ授業や学習のあり方そのものを強く内面化しており、それを無意識的に自身の授業スタイルに反映させていた（大坂；2021）。

本調査は1名を対象としたケーススタディに過ぎないものの、教師志望学生は高校までと同様に大学教育をも被教育経験化してしまう危険があること、それを回避するためには自身が内

面化した経験や教育観を言語化し他者に提示する機会が必要なこと、そしてその省察のパートナーとして教師教育者が有効に機能しうること、といった教師教育上の有益な示唆を仮説的に提示することができた。

(2) 教師教育者に関するセルフスタディの成果

教師教育者である研究代表者が研究協力者（大学教員）とともに実施した、自らの実践を対象とする「セルフスタディ」においては、教師によるカリキュラム開発や教育理論の獲得を目指す教師教育者が、自らの専門性をどのように活かして目的を達成させようとしているのかという理論的根拠が明らかとなった（大坂；2019）。また、別の研究協力者（大学教員）を加えて実施した類似するセルフスタディの成果として、教師教育者は、(1) 自分たちの教育経験に基づいて「主体性」の意味を定義していたこと、(2) それが自分たちの教育経験に基づいていることを意識せずに、自分なりの「主体性」を学生に提案していたことを発見した（Saito *et. al.* ;2022）。これらの研究を通して、教員養成機関に所属する教師教育者は、セルフスタディを通して無意識的に自明視している被教育経験に基づく教育観・教師教育観を省察したり、自身の教師教育実践の理論的根拠を探究・言語化することが専門性開発に有効であることが示唆された。

研究代表者が2017年度に実施した、社会科教員養成に携わる5名のセルフスタディプロジェクトの省察と論文化のプロセスを通して、5名はセルフスタディに取り組んだ意義として、実践の改善に向けたアイデアやノウハウの獲得、心情・モチベーションの変化、教師教育実践の省察やメタ認知・相対化、教師教育に関する課題・関心の芽生え、コミュニティ（同僚性）の構築と課題意識の共有、の5点を見出していたことが明らかとなった（大坂ほか；2022）。本研究を通して、セルフスタディは初任期の教師教育者にとって単なる技術的・短期的なメリットのみならず、所属する職場や状況を越えた「つながり」を生み出す効果があることが示唆された。また、本研究を通して、ICT（オンライン）を活用したセルフスタディを通して、初等・中等学校における教師経験に乏しい教師教育者が所属機関を越えて協働し、自身の実践を構想・省察・改善できる可能性を示すことができた。

<引用文献>

- Crowe, A. R. (Ed.). (2010). *Advancing social studies education through self-study methodology: The power, promise, and use of self-study in social studies education (Vol. 10)*. Springer Science & Business Media.
- Hawley, T. S. (2010). Purpose into practice: The problems and possibilities of rationale-based practice in social studies. *Theory & Research in Social Education*, 38(1), 131-162.
- 大坂遊・渡邊巧・岡田了祐・斉藤仁一郎・村井大介（2022）「教師経験の乏しい教師教育者はどのように教師を育てることと向き合うのか：初任期にセルフスタディに取り組んだことの意味」『周南公立大学論叢』1, 23-46.
- 大坂遊（2021）「駆け出し期の社会科教師は「大学で学んだこと」をどのように意味づけていくのか？：継続的インタビュー調査を通じた大学カリキュラムのとらえ直しに着目して」『全国社会科教育学会第70回全国研究大会発表要旨集録』.
- 大坂遊(2019)「駆け出し教師教育者は自らの実践をどのように形作っていくのか:「理論的根拠」の形成に注目した実践原理の探究」『教育学研究紀要 (CD-ROM版)』65, 7-12.
- Saito, M., Osaka, Y., & Watanabe, T. (2022). Our Search for *Shutaisei*: Self-study of Three University-Based Teacher Educators. *Studying Teacher Education*, 1-19.

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計8件（うち査読付論文 1件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 6件）

1. 著者名 大坂 遊、泉村 靖治、櫻井 良種、田中 雅子、八島 恵美、河村 真由美	4. 巻 28
2. 論文標題 教師教育者のアイデンティティの獲得プロセス：指導主事や特別支援教育コーディネーターへの移行にもなう転機や困難に注目して	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 学校教育実践学研究	6. 最初と最後の頁 81～91
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.15027/52348	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 齋藤 真宏、大坂 遊、渡邊 巧、草原 和博	4. 巻 28
2. 論文標題 教師教育者の専門性開発としてのself-study（セルフスタディ）：その理論的背景と日本における受容と再構成	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 学校教育実践学研究	6. 最初と最後の頁 105～120
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.15027/52350	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 大坂遊、川口広美、草原和博	4. 巻 26
2. 論文標題 どのように現職教師から教師教育者へ移行するのか：連続的・漸次的に移行した教師教育者に注目して	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 学校教育実践学研究	6. 最初と最後の頁 87-94
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.15027/49118	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 大坂遊	4. 巻 65
2. 論文標題 駆け出し教師教育者は自らの実践をどのように形作っていくのか：「理論的根拠」の形成に注目した実践原理の探究	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 教育学研究紀要（CD-ROM版）	6. 最初と最後の頁 7-12
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 大坂遊, 櫻井良種	4. 巻 1
2. 論文標題 教育行政における教師教育者は移行期にどのような葛藤や困難に直面するのか：入職期の研修担当指導主事の語りに着目して	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 周南公立大学総合研究所紀要	6. 最初と最後の頁 103-112
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 真加部 湧大、篠原 嶺、村上 聡恵、大坂 遊	4. 巻 29
2. 論文標題 学校基盤の教師教育者が直面する葛藤とは何か：校内研究・研修主任を経験した2名のセルフスタディを通して	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 学校教育実践学研究	6. 最初と最後の頁 135 ~ 146
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.15027/53833	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 大坂遊, 渡邊巧, 岡田了祐, 斉藤仁一朗, 村井大介	4. 巻 1
2. 論文標題 教師経験の乏しい教師教育者はどのように教師を育てることと向き合うのか：初任期にセルフスタディに取り組んだことの意味	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 周南公立大学論叢	6. 最初と最後の頁 23-46
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 Saito Masahiro, Osaka Yu, Watanabe Takumi	4. 巻 19
2. 論文標題 Our Search for <i>Shutaisei</i>: Self-study of Three University-Based Teacher Educators	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 Studying Teacher Education	6. 最初と最後の頁 128 ~ 146
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.1080/17425964.2022.2137668	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計9件（うち招待講演 1件 / うち国際学会 1件）

1. 発表者名 大坂 遊
2. 発表標題 駆け出し期の社会科教師は「大学で学んだこと」をどのように意味づけていくのか？：継続的インタビュー調査を通じた大学カリキュラムのとらえ直しに着目して
3. 学会等名 全国社会科教育学会第70回全国研究大会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 Masahiro Saito , Yu Osaka , Takumi Watanabe , Kazuhiro Kusahara
2. 発表標題 Introduction, localization, and divergence of self-study in the context of Japanese society: Dilemmas of teacher educators
3. 学会等名 ATEE 2021 Annual Conference 2021 (国際学会)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 教師教育者のためのセルフスタディ：研究の歴史・思想から実際まで（5）
2. 発表標題 齋藤 眞宏、渡邊 巧、大坂 遊、草原 和博
3. 学会等名 広島大学教育ヴィジョン研究センター第76回定例オンラインセミナー
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 齋藤 眞宏、大坂 遊、渡邊 巧
2. 発表標題 教師教育者が学生に期待する主体性：協働的なセルフスタディを通じた批判的考察
3. 学会等名 日本教師教育学会第30回研究大会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 大坂遊
2. 発表標題 学生・教師の実態から社会科教師の育成を考える
3. 学会等名 2019（令和元）年度日本教育大学協会社会科部門関東地区研究会・日本社会科教育学会共催シンポジウム（招待講演）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 大坂遊
2. 発表標題 駆け出し教師教育者は自らの実践をどのように形作っていくのか？：セルフスタディを通した「理論的根拠」の形成に注目して
3. 学会等名 中国四国教育学会第71回大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 渡邊巧，大坂遊
2. 発表標題 教員養成で「自律的・協働的にカリキュラムをつくる」ことは教えられるのか：生活科の講義における「私（たち）」のセルフスタディ
3. 学会等名 全国社会科教育学会第68回全国研究大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 粟谷好子，石川照子，大坂遊，星瑞希，草原和博
2. 発表標題 社会科教師教育の常識を問い直す：エビデンスから考える教員養成・教員研修のあり方とは
3. 学会等名 全国社会科教育学会第68回全国研究大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 草原和博, 渡邊巧, 大坂遊, 西田めぐみ, 齋藤眞宏, 夏井一哉, 内田千春
2. 発表標題 セルフスタディができる教師を育てる: 教師と教師教育者のディスカッション
3. 学会等名 中国四国教育学会第74回大会
4. 発表年 2022年

〔図書〕 計2件

1. 著者名 棚橋 健治、木村 博一	4. 発行年 2022年
2. 出版社 明治図書出版	5. 総ページ数 272
3. 書名 社会科重要用語事典	

1. 著者名 日本社会科教育学会	4. 発行年 2022年
2. 出版社 東信堂	5. 総ページ数 312
3. 書名 教科専門性をはぐくむ教師教育	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------	---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------